フリージャーナリスト
堀川（ほりかわ） 恵子（けいこ）さん（1992年 総合科学部卒業）
焦らず、一所懸命。

NHKのETV特集『死刑囚 永山則夫～獄中28年間の対話』で第47回ギャラクシー賞テレビ部門大賞受賞。同じく永山則夫を題材にした著作『死刑の基準～「永山裁判」が遺したもの～』で第32回講談社ノンフィクション賞を受賞。今、注目のフリージャーナリスト、堀川惠子さんは、広島大学総合科学部の卒業生です。

2月末にNHKで放送予定の『法務大臣の決断』の取材で忙しい合間を縫って、インタビューに応じてくださいました。

著作『死刑の基準～「永山裁判」が遺したもの～』。4人を射殺した死刑囚が遺した15,000通の手紙をもとに、その心の軌跡を追いながら、人が人を裁くことの難しさを追究した作品。

とにかく、精いっぱいやる。学生時代はそれしかないでしょう。

テレビや出版の世界で仕事をしているので、「マスコミで仕事をするにはどうしたらいいか」とアドバイスを求められることがありますが、言いたいことは一つ。とにかく、いろんなことを経験してみる。学生時代にできることはそれしかないですよね。

学生時代は、世の中のことなんてまだ何も分からない。自分に何ができるのか、自分は何をしたいのか……今の学生さんもおんなじでしょう。何も分からないから、いろんなことをやってみる。何かつかめそうだったら、そこで一所懸命やる。それが、学生だと思うんですよ。

■堀川惠子さんプロフィール■
1992（平成4）年広島大学総合科学部外国語コースを卒業後、広島テレビ放送に入社。『ニッポンの筆　世界に挑む』『チンチン電車と女学生』など、制作した番組が高い評価を受ける。2004年退社し、フリーディレクターとしてドキュメンタリー番組を制作。2009年には著作が講談社ノンフィクション賞を受賞するなど、作家としても注目を集めている。3月には新刊『裁かれた命～死刑囚から届いた手紙』（講談社）が発売される。

中途半端はダメ、とにかく、自分の精いっぱいをやる。そこから、少しずつ自分の道が見えてくるんじゃないでしょうか。

卒業論文は取材レポート。先生が背中を押してくださった。

私の場合、一つのステップとなったのは卒論です。

テーマは『異文化間のコミュニケーション』だったんですが、私、留学生を中心に、広島で暮らす外国人に、広島での生活や、日本人に対する気持ちなどをインタビューして問題を分析することにしたんです。友だちに紹介してもらった留学生はもちろんですが、飛び込みで外国人のアパートのドアをたたいたこともありました。まさに「取材」ですよね。これ、すっごくいい経験になりました。

当時の卒論は、文献を読んでまとめるのが普通だった。だから、審査会で、私の卒論に対して「これは論文ではない」という意見もあったそうですが、指導教官のゴールズベリ先生が、なんとか卒業させてくださった（笑）。

堀川惠子さんにインタビューする総合科学部後輩の森内さん（左）と村上さん（右）

卒論に限らず、先生は「それはいけない」っておっしゃったことがないんですよ。「君が思ったようにやってみればいい」って、いつも背中を押してくださった。感謝しています。

それ以来、自分の足で歩いて取材することは、ジャーナリストとしての私の基本です。人に実際に会って話を聞き、自分の目と耳で確かめる。地道で、ネタにならないことも多いけど、いつか、必ず何かのカタチでプラスになります。「取材は裏切らない」んですよ。

衝撃的な映像に出会った。それが転機だった。

テレビ局に入社して以来、ずっと映像で何かを伝えることを考えてきたわけですが、ある日、衝撃的な映像に出会ったんです。『エリックとエリクソン』……ハイチのストリートチルドレンを10年にわたって追ったNHKのドキュメンタリー番組です。その中の映像――猫の首にヒモが巻き付いてしまって、必死で解こうともがくんだけど、どうにもならない。その様子を1分以上、ナレーションなしでずっと流している。抜け出したいけど抜け出せない、エリックたちの姿そのものと重なるんですね。頭を打たれたような気がしました。

「こんなカメラマンと一緒に仕事をしたい！」と、テレビ局を辞めて、東京に行こうと決心しました。

当時、管理職になって現場の仕事から離れたフラストレーションもあったと思うんです。1年間何とかガマンしたけど、やっぱり私は机の上だけで素材を集めて番組を組み立てるのは性に合わない。現場が合っているんだと思います。泥臭くても、休みがなくても、3Kでも、そこで呼吸してると、アドレナリンがワーッと出てきて、自分を動かしていく。そんな感覚から逃れられない。

今のうちにいっぱい失敗を。そこから軸足が固まっていく。

「ジャーナリスト」という仕事は難しい。自分が作った番組や本によって、時には、人の人生を傷つけることだってあるかもしれない。だから、いろいろなことを考え、それでも作らなければならないという、「覚悟」というか、揺るぎない軸が必要なんです。

揺るがない軸を持つには……なんて、エラそうなことは、言えない。私自身、常に揺れていますから。

ただ、ジャーナリストを志望する若い人に言いたいのは、「頭の中だけで考えて、軸を持とうと焦るな」ということです。それよりも、今のうちに「失敗」をたくさんして、落ち込んだり苦しんだり泣いたりすること。その繰り返しの中で、人間はどうあるべきかと考えるようになり、自分なりの軸ができていくのだと思います。

傷つかないように、限られた友だちと付き合い、インターネットを相手にするだけの「半径5メートル」の生活からは、人間や社会を切る軸は、絶対に育ちませんよ。

堀川さんの広大生時代

高校時代にハードル選手として名を馳せた堀川さん。しかし、「自分が一流の選手になれるなんて思えなかったから」大学では陸上をスッパリとやめた。そのかわり、ESS、社交ダンス、家庭教師……と、さまざまなことにチャレンジしたという。

そんな経験の中で、やがて、映像の世界との接点を見つける。それが、広島市のPR大使。広島市のさまざまな側面を広報するアルバイトだった。ここでテレビや新聞など報道の仕事に触れ、「世界が広がった」。それから、アナウンス養成講座に通い、志望をテレビ局に絞って勉強を始めた。

「いろいろやって、失敗しながら何かをつかんでいく」――後輩たちへのアドバイスそのものの学生時代だったようだ。

PR大使で外国からのお客さまを平和公園に案内した。大学3年生の堀川さん。

後輩から

先輩インタビューを終えて

森内（総合科学部） 私もジャーナリストを目指しているということもあって、堀川さんのお話はすべて、ズシンと心に響くものでした。「なかなか他人の心に迫れない」と相談すると、「結局怖いことから逃げているんじゃない」と、自分の気弱な部分をズバリと指摘されてしまいました。何事も逃げずに直視する。ジャーナリストを目指すなら基本ですよね。どうすれば人と本気で向き合えるか――一所懸命、考えます。

村上（総合科学部） 私は、自分がしたいことは何か、なりたい自分はどのようなものかを見失っていて、それを探すことに必死でした。でも、堀川さんは言われました。「自分の軸が定まらず思い悩むが、それでも猛進していく。人の評価より、大事なのは自分が満足をすること」――自分の価値観や本当に大事にしたいことをもう一度、考えてみます。そして、堀川さんのように、したいことに恐れず挑戦しようと思います。

表紙「贈る言葉」取材を終えて

後藤（経済学部・前列向かって右端） 新田さんが、ESSで活動しておられた頃の姿勢を今も変わらず持ち続け、信念・情熱をもって仕事に取り組まれているのだということに強く感動しました。学生時代の友人は、会社や仕事は違っても、共通の思い出という、根っこでずっと繋がり続けることができるのですね。4月から私も社会人です。新田さんのように「新しい価値を生み出す」仕事をするべく精進していきたいと思います。

2010年暮れの忘年会に集合したE.S.S.の卒業生＆現役生。

福田（文学部・前列左端） 先輩方が、ESSというサークルに情熱を注ぎ、それを誇りに思っておられることが伝わってきました。この精神がずっと受け継がれているから、後輩もESSに惹かれるのだと思います。広島大学ESSと出会えて、みんなに出会えて、良かった。「何かに打ち込んだ経験があるから新しいことにも積極的になれる」と新田先輩は言われました。私も、こう言える社会人になりたいと思います。